

シアトルにおけるダイバーシティ研修の試み

－ 7年間の実践を通して見たプログラムの有効性と可能性－

立松 大祐, 小助川 元太, ボグダン・デイビッド

愛媛大学教育学部

A Look at a Diversity Studies Program in Seattle

－ Examining the Effectiveness and Possibilities after Seven Years －

Daisuke TATEMATSU, Ganta KOSUKEGAWA, David R. BOGDAN

Faculty of Education, Ehime University

1. はじめに

今日の学生に求められる資質の一つは、急速に広がるグローバル社会に対応できる力である。それは多様なものの見方、考え方ができること、違いを理解し尊重しようとする姿勢、理解と尊重を生み出すためのコミュニケーション能力を意味していると考えられる。法務省の在留外国人統計（2017年12月）では、250万人以上が在留しており、保・幼・小・中・高等学校の教室においても外国とつながりのある子どもの人数は増加していると考えられる。また、2017年度の訪日外客数は2800万人を越えて（日本政府観光局、2018）、2018年度は3000万人超を窺う勢いが見込まれている。大学においてもグローバル人材の育成を目指し、留学生の受け入れや派遣に力が入れられている。

このような情勢を踏まえ、愛媛大学教育学部では、学術交流協定校のワシントン大学バセル校（UWB）の協力のもと、アメリカ合衆国ワシントン州シアトルにおいて約2週間にわたるダイバーシティ研修を行っている。本研修は、地球的視野に立って、多様性を理解・尊重する精神を備え、多様性を社会の活力に変えていくことのできる人材の育成を目的として、2011年度から始めたものである。特に、近年のアメリカ社会における人種、移民、ジェンダー、セクシュアリティを軸とした平等化と多様化への動き（ホーン川崎、2018）や教育の動向を反映させた研修内容は、学生が日本では実感しにくいアメリカ社会の現実を学ぶ機会として有効であると考えられる。本稿では、この研修の7

年間の実践と成果を報告することで、大学教育における本研修の有効性と可能性を指摘し、今後の研修のさらなる充実につなげることを目的にしている。

2. UWB（ワシントン大学バセル校）多文化共生体験学習プログラムの誕生の経緯と目的

現在、愛媛大学教育学部の教員が中心となり企画している海外の学術交流協定校での研修プログラムは5つである。それぞれの研修の主な参加者は愛媛大学教育学部の学生であり、学生のニーズに合わせてプログラムの内容を発展させている。アジアで実施されている研修は3つである。まず、遼寧師範大学（中国）で行われる日中文化比較体験プログラムであり、中国への理解や中国の大学生に日本語や日本文化を紹介する活動を行っている。本プログラムにおいては、希望者は交換留学生として6か月または1年未満の留学をすることができる。次に、順天郷大学（韓国）での研修は、現地に4か月または10か月滞在し、韓国語と英語の習得を目指す語学留学が中心である。交流協定により、授業の単位を相互認定することもできる。3つ目は、フィリピン大学教育学部附属小学校での教育実習である。現在はステップコースとアドバンスコースに分けられ、前者では学校視察が、後者は教育実習が行われている。海外での教育実習を希望する学生のニーズに応えるプログラムである。

アメリカでのプログラムは2つである。まず、ルイジアナ大学モンロー校を拠点として周辺の小中学校を視察し、日本文化の紹介を行う教育視察研修である。次に、本稿で紹介するワシントン大学バセル校 (UWB) を拠点とした多文化共生体験学習プログラム (ダイバーシティ研修) である。

UWB 研修は、愛媛大学教育学部総合人間形成課程国際理解教育コースの集中講義「海外体験学習 (英語圏)」のプログラムとして、2011 年度から実施が始まった。総合人間形成課程は学部改組により 2016 年に募集停止されたが、教員免許取得を卒業要件としないいわゆるゼロ免課程として、2008 年度に教育学部に設置されたもので、特に、地域の多様な生涯学習活動において中心的指導的な役割を果たし、豊かな地域文化の創出と推進に貢献できる人材の育成を目標に、多くの人材を世に送り出してきた。とりわけ国際理解教育コースは、国際理解及び国際交流のための諸活動の実践において、その中心的な役割を果たし得る人材育成のための授業科目を揃えていたが、当初から実施されていたアジア圏の大学における研修に比べ、比較的学生からのニーズが高かった欧米文化圏の大学でのプログラムは、ほとんど実施されていなかった。そこで、2010 年度に、英文学や英米事情等を担当していた竹永雄二教授 (当時) と国際連携推進機構のルース・バーজন准教授 (現在国際連携企画室教授) によって、愛媛大学の学術交流協定校の 1 つである UWB においてダイバーシティを学ぶ 2 週間の研修プログラムの導入が提案され、異文化間コミュニケーション担当のデイビッド・ボグダン教授と、当時コース主任だった小助川元太准教授 (当時) が企画・実施スタッフに加わり、コースの集中講義科目「海外体験学習 (英語圏)」として実施される運びとなった。

3. 研修プログラムの発展

(1) 参加学生数

2011 年度から 2017 年度まで実施回により若干の差はあるものの、JASSO や学内の国際 GP などの奨学金給付人数の影響を受け、参加学生は 8 名から 10 名で推移している。表 1 は第 1 回から第 7 回研修の期間、参加学生の所属と人数をまとめたものである。

表 1. 研修実施期間と参加学生の内訳

実施回 研修期間	参加学生人数		
	所属学部	回生	人数
第 1 回 2011 年 9 月 2 日 ～ 9 月 18 日	10 名 (男性 4 名, 女性 6 名)		
	教育学部	1 回生	7 名
	教育学部	2 回生	1 名
	教育学部	3 回生	1 名
	教育学研究科	1 回生	1 名
第 2 回 2013 年 3 月 2 日 ～ 3 月 16 日	10 名 (男性 5 名, 女性 5 名)		
	教育学部	1 回生	4 名
	教育学部	2 回生	4 名
	教育学部	3 回生	2 名
第 3 回 2014 年 3 月 1 日 ～ 3 月 15 日	8 名 (男性 3 名, 女性 5 名)		
	教育学部	1 回生	1 名
	法文学部	1 回生	2 名
	理学部	1 回生	1 名
	教育学部	2 回生	2 名
	農学部	3 回生	1 名
	教育学部	4 回生	1 名
第 4 回 2015 年 3 月 1 日 ～ 3 月 16 日	8 名 (男性 1 名, 女性 7 名)		
	教育学部	1 回生	7 名
	教育学部	2 回生	1 名
第 5 回 2016 年 3 月 5 日 ～ 3 月 21 日	8 名 (男性 4 名, 女性 4 名)		
	教育学部	1 回生	2 名
	教育学部	2 回生	5 名
	教育学部	3 回生	1 名
第 6 回 2017 年 2 月 22 日 ～ 3 月 10 日	10 名 (男性 3 名, 女性 7 名)		
	教育学部	1 回生	3 名
	教育学部	2 回生	4 名
	法文学部	2 回生	1 名
	教育学部	4 回生	1 名
	教育学研究科	1 回生	1 名
第 7 回 2018 年 3 月 3 日 ～ 3 月 19 日	8 名 (男性 2 名, 女性 6 名)		
	教育学部	1 回生	4 名
	教育学部	2 回生	2 名
	工学部	3 回生	1 名
	教育学研究科	1 回生	1 名

(2) プログラムの実施体制づくり

第 1 回目のプログラムを始めるにあたり、内容の企画、学生の募集と指導、UWB の教職員や関係各所との連絡調整などを行うために、愛媛大学では国際連携推進機構の教職員、教育学部の教員で実施体制を作った。学生と引率教員は海外渡航における病気やケガ、事件などの危機を未然防止し、早期対応と解決できる知識とスキルを身に付けるため、愛媛大学で開催されている危機管理セミナーを受講している。

UWB の受け入れ体制は、Global Initiatives, Center for International Education, Human Resources の関係職員、Director of Diversity, 教育学部教員などにより構成され、プログラムへの助言や連絡調整ならびに現地でのプログラムの実施を担当した。プログラムは第 7 回まで完了しているが、UWB 側の体制に若干の変更があった。例えば、学生のホームステイに関することである。第 3 回までの研修

では、UWB 職員がホストファミリーの募集や割り振りを差配していたが、第4回研修では大学近くのホテルに宿泊する変更を行った。これは通常の職務に加えて、ホストファミリーの選定など業務負担の大きさが原因である。そこで、第5回と第6回研修ではUWBのCenter for International Educationの紹介により、シアトル市内で留学生の研修プログラム等を企画する民間企業のExperience Americaにホームステイの調整を依頼した。

第7回研修ではプログラムの実施担当とホームステイの調整について、さらに変更を加えた。UWBのGlobal Initiativesのディレクターから、ワシントン大学シアトル校(UW)にオフィスを置き、長きにわたり留学生のための研修やプログラムを提供しているNPO団体のFIUTS(Foundation for International Understanding through Students)の紹介を受けた。これにより、多様性研修プログラムの専門集団であるFIUTSが研修プログラムの内容とホームステイのコーディネートを行い、UWBはプログラムに必要な学習内容と人材及び施設を提供する体制へと改善することができた。

(3) プログラム内容の変遷

研修プログラムは参加学生のニーズに応じて回を重ねるごとに少しずつ変化させている。ニーズの把握は研修参加決定者との事前学習や面談を通して行われ、例えば特別支援教育についての学習希望が強い場合は、特別支援学級などへの見学が可能であるかUWB側と交渉している。本稿においては、第1回目と第7回目のプログラム内容を概観して、継続して行われている内容と新しい内容を確認し、特徴的な取組の内容を説明する。表2は、第1回研修と第7回研修で訪問した施設をまとめたものである。当初から継続して訪問しているのは10箇所である。変更ありの項目の訪問場所と活動内容については後に概説をするが、ダイバーシティの学習内容を広げ、ボランティアなど活動しながら学ぶことができるよう改善した結果である。また、学校訪問と学生交流を大幅に増やしたことも改善点である。マイクロソフト本社は研修の提供を止めたため、第7回からは訪問をしていない。

表2. 第1回研修と第7回研修の主な研修場所

第1回 (2011年)	第7回 (2018年)
ダイバーシティ研修：主な研修場所	
共通	
- Pike Place Market - Downtown - Pioneer Square - Wing Luke Museum of the Asian Pacific American Experience - Ethnic Cultural Center - Q Center - UW Asian Library - OneWorld Now! - Mariner High School - UWB	
変更あり	
- Capitol Hill - Office of Minority Affairs and Diversity - Northwest African American Museum - Burke Museum - International Rescue Committee - Microsoft Global Diversity and Inclusion Team	- Kids4Peace - Real Change - Food Banks (Ballard & University District) - Uwajimaya (Bellevue & Downtown) - Bainbridge Island Historical Museum - UWB Diversity Center
学校訪問, 学生交流	
- Mariner High School - UWB Student Leaders	- Mariner High School - Chief Sealth International High School - UWB Japanese Class - TOPS K-8 School - UW Ambassadors

(4) 主なプログラム内容

第1回から第7回研修まで共通のプログラムと第7回研修における特徴的なプログラムを概観する。

1) UWB及びUWでのダイバーシティ研修

UWBはダイバーシティを大学教育と運営の基盤となる重要な価値と位置づけ、目標達成のためのアクション・プランを制定している。その一部は次のような内容である。

- Diversity-Related Institutional Assessment and Goal Setting for all Units
- Diversity-Related Space
- Diversity-Related Training
- Diversity-Related Support Services
- Diversity-Related Programming
- Diversity-Related Community Engagement

多様性に関連して、評価と目標の設定、空間の確保、研修、支援サービス、プログラム開発と実施、社会参画への取組があげられている。大学が内包する多様性とは、マイ

ノリティに属する有色人種、留学生、英語力が不十分な学生、女性、子どもを持つ学生、軍務を退役した学生、宗教活動家、移民第一世代、特別支援を必要とする学生、不法移民、性的マイノリティの学生・教職員である。ひときわ印象的なのは、マイノリティの学生が安心かつ快適に過ごすことのできる空間、体験を共有できる空間の確保とメンタリング・サービスが充実していることであった。

UWのQ Centerは、LGBTQの学生や教職員が安心して利用できる施設であり、立ち寄りやすい学生会館内にある。毎日数十名の利用があり、定期的に訪れる学生がいたり、精神的疲労により避難所的に訪れたりする状況がある。利用者は性的マイノリティについての相談、飲食を含む休憩による精神安定、自習、イベントなどの啓蒙・啓発活動の計画などができる。常駐の職員からセンターの目的やLGBTQ学生・職員を巡る取組について説明があり、大学においても誰もが心地よく安心できる空間作りが必要であることが強調された。

同じく、UWのEthnic Cultural Centerはメインキャンパスからごく近い場所に建物を構えている。ここでは様々なエスニシティの学生が自由に懇談し、独自の文化への誇りを共有し、文化活動を行うことのできる個別の部屋、会議室に加え、演劇、音楽演奏、映画上映ができる劇場を提供していた。安心して過ごすことのできる空間がそれぞれの学生が専攻する学問領域への集中、さらに高い専門性の獲得とそこから生まれる新しい創造性につながるという確信をもち運営されている。不法移民を親に持つ学生(undocumented students)に対するメンタリングや、公正で平等な教育機会を求めるための教育が提供されており、アメリカ社会の複雑な多様性に対する先進的な取組を学ぶことができる。また、このセンターで訪問者の支援などの運営を手伝っている学生自身も少数民族出身や留学生であり、マイノリティの学生が主体的に活躍する場となっている。

2) 日系、中国系等アジア系移民の文化施設訪問

アメリカ社会の多様性理解のために、シアトルのインターナショナル・ディストリクト（第二次大戦前は日本人町であった）のWing Luke Museum of the Asian Pacific American Experienceを訪問した。ここは、様々な迫害を克服し、アジア系移民として初めてシアトル市議会議員に選出された、Wing Luke氏の功績を記念して建てられた博物館である。日本を含む様々なアジア系移民の歴史、文化、移民の歴史に関する展示物がある。図1は日本人町があった頃の様々な店舗の看板を展示したものである。

展示物の解説から移民生活の苦難の歴史を学ぶことができる。特に印象的であったのは、二階の建物と建物との間の狭い空間で、そこには天上にはめられたガラス板から無数の短冊形の白い紙切れが糸につながれ、微風にひらひらと



図1. 日本人町があった当時の店舗の看板展示

舞っている（図2）。天井のガラス板は海を象徴し、紙片には海を渡ってアメリカにやって来た人々の苦難と悲しみ、夢と希望の物語が綴られていると解説文にある。素朴ではあるが、アメリカ社会を造り出して行った人々の苦難の旅へと思いを馳せることができ、多様性理解につながる印象的な展示物である。

第7回目のプログラムでは、Bainbridge Island Historical Museum 訪問を追加した。シアトルからフェリーで渡ることができるこの島は、日系移民にとって象徴的な場所である。博物館では、日系移民の子孫であるガイドから1880年代に日系移民一世が島に移住して以来の生活、1942年に集団強制立ち退き命令を受けて強制収容所に送還された歴史などについて説明を受けることができる。Bainbridge Island Japanese American Exclusion Memorialの展示では立ち退きの歴史をつぶさに見学でき、戦争により人生が大きく変わらざるを得なかった日系人の歴史を学習することができた。



図2. 白い短冊の展示

3) 共生社会実現のための取組

シアトルには世界に躍進するアマゾン、スターバックス、ボーイング、マイクロソフトなどグローバル企業がひしめいている。その中で特にマイクロソフト社はDiversity & Inclusionを重要な企業戦略の一つとし、先進的な取組をしているので、プログラムとの関連性から、第1回目の研

修から毎年訪問していた。マイクロソフト社の基本的な考え方は、社員一人ひとりの多様性、経歴、教育、文化、信条、考え方、視点等の多様性が結集した時、新しいソリューションが生まれ、そこから開発された製品が顧客一人ひとりの満足を生み出し、様々な人々のニーズに応え、人々の持っている力をより強力にし、そのことによって新しい文化を造り出し、世界の発展に貢献するということである。グローバル企業のダイバーシティに対するビジョンを参加学生に学ばせたかったが、外部へのダイバーシティ研修を取りやめたため、第7回研修では新たに次の3つの訪問を行った。

まず、Kids4Peace への訪問である。このNPO 団体は、暴力や紛争・戦争に反対し平和な社会を担う子どもたちの育成を行っている。特に、宗教の壁を越え、互いの考え方を受け入れて尊重する態度を重んじており、実際にこの活動に集まる子どもたちの家庭はユダヤ教、キリスト教、イスラム教を背景としている。日本人家庭の子どもたちも参加しているようである。この団体で使用される言語は英語、フランス語、ヘブライ語、ヒンディー語である。多様なプログラムを実践しており、12歳から18歳まではリーダーになるための学習を行う。この期間は同じことを何度も学ぶことで学習内容が身に付くようにしている。18歳からはリーダー役として子どもたちに教える側に立ち、プログラムを推進している。また、UW など大学生のインターシップを数多く受け入れている。図3は、目を閉じて、毛糸を使ってファシリテーターから指定された図形を作るワークショップの一場面である。



図3. Kids4Peace でのワークショップ

次に、Real Change への訪問である。このNPO 団体はシアトルで主に低所得者やホームレスの自立支援を行っている。その生活支援方法は、毎週水曜日に発行されるReal Change Newspaper をベンダーと呼ばれる主に要支援者（ホームレスや低所得者）に1部60セントで購入をさせ、シアトルの街頭で市民に2ドルで販売するのである。1部販売すると、自己負担額との差額1ドル40セントがベンダーの利益となる仕組みである。記事を書いたり、編集をしたりするスタッフにはかつて自身がホームレスであった者も含まれるなど、支援の方法は実際的なものであ

る。街頭にはReal Change Newspaper を販売しているベンダーを見かけることがあり、参加学生はその支援の仕組みに納得したようである。

OneWorld Now! は、グローバル社会に通用する次世代の若者のためのリーダーシップ教育を主目的としている民間団体である。特徴的な事業例としては、外国語教育の推進である。地元の高等学校までの教育ではあまり行われていないが、企業からは高い需要のある外国語、すなわち、中国語、朝鮮語、ロシア語、アラビア語を積極的に教えている。参加学生との質疑応答からこれらの言語はビジネス面と国防の面から考慮され選択されていることが分かった。参加学生のほとんどにとって、有事の際に活躍できる若者を育成するということを民間団体が考えていることは新鮮であったようだ。その他、若者の海外留学の支援やリーダーシッププログラムの開発と提供を行っている。

4) 学校訪問・日本文化紹介活動・教育実習体験

UWB で開講されている日本語のクラスで日本文化紹介として、事前学習で作成した紹介ビデオを使い愛媛県と愛媛大学の紹介を行った。UWB の学生と参加学生は訪問の約1か月前からメールによる交流を行っているため、クラスでは初対面ではあるが、温かい雰囲気を感じる。この交流はUWB の担当教員と愛媛大学の引率教員との数年に及ぶ人間関係づくりの成果である。次に俳句ワークショップに挑戦した。まず日本からの参加学生が、俳句の歴史、特に愛媛にゆかりの深い近代俳句の改革者とされる正岡子規について、続いて俳句の作り方について英語で紹介した。俳句を日本語で実際に創作するために、季語などの基本的な説明をした後、グループに分かれ、用意された写真を見てグループで俳句を詠むこと、日本人学生も参加して創作を手伝うことが説明された。当初、アメリカ人の学生がどれくらい反応してくれるか不安であったが、言葉と文化の壁を越えて、熱心に創作活動が行われていた。

Mariner High School への訪問と一日高校生体験は、事後学習における学生へのインタビュー調査で総じて評価が高く、現在まで継続しているプログラムである。Mariner High School は、生徒のルーツとなる国が60箇国を超える、地域でも飛びぬけて多様性に富む学校である。それぞれの学生にはバディと呼ばれる生徒が1人ずつあてがわれ、そのバディと全く同じ授業を受けて1日を過ごすのである。つまり、英語で数学や理科などの科目を受けたり、カフェテリアで昼食をとったりするのである。バディの生徒と愛媛大学の学生は渡航前からフェイスブックなどのSNSを通じて交流を始めていたこともあり、スムーズに友人関係を構築することができた（図4）。愛媛大学のプログラム開発教員とMariner High School の教員は旧知の間柄であり、学生交流を行う考えに積極的であったことから実現できている取組である。放課後は日本語クラブの活動に参加

し、クラブの生徒と交流を行っている。第7回目の研修では、日本人学生からは、自己紹介と俳句ワークショップを行った。クラブの生徒からは、歓迎のためのダンス披露、メキシコやフィリピンなど生徒らのルーツである国を代表する料理のふるまいなどがあった。



図4. Mariner High School のパディとの交流

第7回目の研修では、参加学生のニーズに合わせて、Chief Sealth International High School の日本語教室の授業観察と交流、さらに、TOPS K-8 School の小学校2年生の授業での教育実践体験を加えた。小学校での教育実習については、ワシントン州日米協会の支援を受け、日本の小学校生活の様子を英語で紹介する教材“Taro goes to elementary school – Elementary School Life in Japan”を使用した。渡航前から同協会のスタッフとスカイプでのワークショップを行い、実習のための練習を何度も行った。当日は2クラスで教育実習の機会を得た。その後、校内の視察を経て体育の授業に参加し、子どもたちとバスケットボールなどを楽しんだ。これらの体験はアメリカの学校での多様な子どもたちの理解に役立ち、日本での教育へ応用する方法を考えることにつながっている。

5) 愛媛フェアへの参加とフードバンクでの活動

2016年3月、愛媛県産業振興課主催による、愛媛の商品を販売する「愛媛フェア」がシアトルの宇和島屋本店とベルビュー店で開催された。宇和島屋は北米で最も成功していると言われる日系スーパーマーケットであり、創業者のルーツが愛媛県にあることが県との協働につながっている。第5回と第7回の研修参加学生は同フェアに参加し、商品の紹介、試食、愛媛のキャラクターである「みきゃん」のぬいぐるみに入る等、販売活動の支援を行った。訪れた地元の人々と活発にコミュニケーションをとることができたこと、わずかではあるが愛媛の国際化に貢献できたことは学生たちにとって貴重な経験となった。

フードバンクでのボランティア活動は新規のプログラムである。フードバンクとは、地元のNPO・NGO団体が大規模スーパーマーケットなどから品質には問題のない食料

品の寄付を受けて備蓄し、経済的に困窮している家庭にそれらを無料で配布する取組である。日本でも同様の取組は広がってきているが、参加学生には身近なものとなっていない現実がある。寄付やボランティアなどを通して互いに助け合おうとする姿勢や態度について、実際にボランティア活動をすることによって学ぶことが多かった。学生は生鮮食料品を含む食品の仕分け、袋詰め、接客などの仕事を半日間体験し、フードバンクの仕組みや運営、アメリカに住む人々の多様性などについて学ぶことができた。

6) 英語クラス

これまでの研修においても英会話の練習が設定されていた回もあった。学生は一般的な内容について気持ちや自分の考えなどを英語で話す練習などが行われていた。第7回の研修においては、一般的な英会話の内容に加え、ダイバーシティプログラムの内容について英語で予習や復習を行うことができるよう、各半日で全8回の計画で実施した。FIUTSのメンバーと英会話講師を交えて相談し、英会話と研修プログラムの内容を統合したCLIL（内容言語統合型学習）を実施した。例えば、Mariner High School や Chief Sealth International High School を訪問する前には日米の高等学校を比較して相違点について学ぶようにして学生の背景的知識や関係する語彙や表現が育成されるように計画した。また、訪問後にはその相違点についてどう考えるかということや、学校で体験したことと気付いたことを語らせるようにした。それにより、英語の学習面では自然な文脈で学校の話題としてよく使われる語彙や表現を学び、目的をもってコミュニケーションの練習をすることができ、同時に、ダイバーシティの内容理解を促進することができた。

7) ホームステイ、UW アンバサダー

学生が現地の言語や生活習慣や文化を学ぶ効果的な方法としてホームステイがある。ホストファミリーも多様性に富んでおり、プログラムの目的にも合致する。本研修においては第4回研修を除き、ホームステイを行っている。第4回においては、UWB 事務職員にとってホストファミリーの募集や割り当てなどの仕事が年々負担となっていたことから、先方の申し出により、ホテルでの宿泊とした。しかしながら、学生にとってはホームステイを行う方が、自然と人間関係が豊かになり、多様性の理解と尊重という研修の目標達成にも近づくので、第5回と6回の研修では先述の Experience America がホームステイ先の確保を行った。第7回研修についてはFIUTSがその業務を担当した。

各ホストファミリーは過去にも留学生を受け入れたことがあり、学生との生活にも慣れていく様子であった。少々の言葉の壁があっても、あいまいさに耐え、学生とのコミュニケーションを図ろうとする受容性も高い。プログラ

ム内容への理解も深く、学生と研修中に学んだことについて語り合おうとする積極的で協力的な態度で接してくれていた。また、ホストファミリーは主たる研修場所である大学まで、公共交通機関を利用して40分程度で到着できる家庭を選定している。地元のバスや電車を使って通学することもよい体験となる。シアトルは比較的治安が良く、バス・電車網が整備されており多くの市民が通勤・通学の手段として利用しているため、学生にとってリスクは低いと考えている。学生の会話にはホストファミリーとの会話の断片が表れ、お互いに理解を深め、新鮮な経験をしていることが伺われた。

ホームステイでの豊かな人間関係に加え、第7回研修では愛媛大学の各学生にUWの学生がアンバサダーという役割で関わるようになった。従来はテスト時期と重なるため、学生同士の交流はあっても深まりは見られなかった。しかし、FIUTSは長年学生を通じた国際理解活動を行っており、プログラムに協力してくれる学生を多く抱えている。そもそも国際理解活動に興味があったり、学生自身もアメリカへの留学生であったり、愛媛大学の学生との交流にも大変積極的であった。学生にとっては、お互いに年齢が近いことが大きなメリットとなり、交流が深まるのに時間はかからなかった。アンバサダーの学生はプログラムの一部に参加して一緒に学び、キャンパス近郊を散策し、レクリエーションを楽しみ、休日にはダウンタウンに出かける等、愛媛大学の学生と友人関係を築いた。帰国後もアンバサダーとの関係は続いており、SNSでお互いの出来事を報告し、アンバサダーであった学生が研修や留学で来日の際には会いに行ったりしている。このような人間関係を築けていることは学生にとっては大きな財産である。

4. 学生のふりかえりと今後の課題

学生は渡航前に行動目標記録表(図5)に、ダイバーシティ、ホームステイ、その他のテーマについて目標設定する。目標は「…できる」の形式で、具体的な行動目標を設定するようにした。その下部は、研修日ごとの記録表であり、帰国の日まで記入し、最後に全体を振り返り、1(全く達成できなかった)から5(かなり達成できた)の5件法で自己評価を行う構成である。図5はその一例であるが、他の学生も紙面に大量に書き込んでおり、研修で学んだことの多さや熱量を感じるものとなっている。例えば、第7回研修の記録表においては次のような記述がある。研修中の出来事を友人との日々の出来事とつなげて考えることができている。

ワークショップでは英語で何の話をしているのかわからず、周りの人に迷惑をかけてしまい申し訳なかった。リアルタイムで内容がわからないというのは、コミュニケーションにおいて大きな障害となるのだと切実に感じた。難聴の友人がいつも人と会話をしている聞き返すのが申し訳ない、大人数だと自分のせいで会話が止まってしまうのがつらい、何の話かわからず話を聞いているのはしんどいと言っていたのを思い出した。私はそんな聞き返してくれたら嫌な顔せずに教えるのにと思っていたが、そういう問題ではないということを、まさかここで実感することになるとは思わなかった。(第7回研修参加学生の記録表より)

表3は第7回研修での自己評価をまとめたものである。学生の自己評価は高く、それぞれの目標をおおむね達成できていることが伺われる。今後も事前学習や事後学習、アンケート調査や面談を通じて学生のニーズを探り、うまく研修プログラムに取り入れる努力を続け、学生の学びへの期待感や満足感を高めることが課題である。参加者の多くは教育学部生であることを踏まえ、ダイバーシティと教育という観点で学校訪問と第7回からは教育実習を行い、実践的な学びの場を設けている。しかしながら、青少年期のLGBTQ当事者は成人以上に深刻な問題を抱えている(はた・藤井・桂木, 2016)ことが指摘されていることから、児童生徒を支援する方法をさらに具体的に学ぶ機会を設定する必要があるであろう。

第7回 愛媛大学UWB研修 行動目標記録表

氏名	
テーマ: 多様性の理解と尊重 自己目標: 「…できる」の形式で具体的な行動目標を設定する。 ◎ (テーマに関すること) ・ダイバーシティについて理解を深める。 ・実際に日本以外で行われている教育に触れ、日本との違いを感じるができる。また、その違いを教育をより良くするために、どのように日本でいかせられるようになる。 ・自分の生活や、また将来教員になって教壇に立つ上で、性別、人種、宗教、価値観、ライフスタイル、障害等の多様性に対してどのような関わりかたをし、何に配慮をすべきかを考えることができるようになる。 ◎ (ホームステイに関すること) ・積極的にホストファミリーと関わる。 ・日本とのライフスタイルの違いを肌で感じる。 ・感謝を忘れない。 ・少しでも自分の思いを伝えることができるように努力を怠らない。 ◎ (その他) ・シアトルの文化、歴史を学ぶ。 ・自分で見通しを立て計画的に行動をする。 ・前向きに様々なことに挑戦する。	
日付	目標に対して達成できたことや課題、新たな目標などを具体的に記録すること
3/3(土)	・オリエンテーションの内容がゆっくりに英語であるにも関わらず、半分以上聞き取れず、かなり焦った。概略だけでも聞き取れるように早く英語になれていきたい。 ・アンバサダーの女性はとても親切で安心した。ただ、聞き取れなかった際、私がうまく聞き返す言葉が出てこなかったり、何回聞いても聞き取れなかったりして、かなり困らせてしまったので申し訳なかった。また説明された内容について聞き取れないままに相づちを打つなど誠実ではないことをしてしまったときもあったのでそれは反省し、気を付けていかなければならないと思う。会話のなかで聞き返したりするために使う単語がすぐに出てくるようにすることが急務であると感じた。
研修を振り返って 自己目標に対して、1(全く達成できなかった)・2(あまり達成できなかった)・3(どちらかというと達成できた)・4(概ね達成できた)・5(かなり達成できた)から選択し、数字を○で囲みなさい。	
テーマに関する目標	1・2・3・4・5
ホームステイの目標	1・2・3・4・5
その他の目標	1・2・3・4・5

図5. 行動目標記録表

表 3. 研修における自己評価の結果

自己評価	(N=8)				
	1	2	3	4	5
テーマに関する目標	0	0	0	3	5
ホームステイの目標	0	0	0	2	6
その他の目標	0	0	0	5	3

また、現地での学習活動をスムーズかつ効果的に進めるためにも事前・事後学習の充実は欠かせない。参加学生との時間調整の難しさもあるが、第7回研修では全12回の事前学習と2回の事後学習の機会を設けた。ダイバーシティの学習やプレゼンテーションの準備を通して、学生の目的意識が高まったと考えられた。今後さらに事前・事後指導の充実を図り、研修終了後にもグローバル人材育成を念頭に、学生がダイバーシティについての課題に対して主体的に行動できるよう支援したい。

5. まとめ

本研修を通して、学生・引率教員が学んだことなどについて整理したい。まず、アメリカ社会が内包する多様性について理解を深め、肯定的評価を高めることができた。次に、マイノリティに属する学生の支援として、安心できる居場所の提供や交流を可能にする支援事業の開発、カウンセリング、ネットワークを通じた情報交換と交流が有効であることが分かった。また、シアトルのアジア系移民の歴史に理解を深め、異文化の中で強く生きて行く姿勢を学んだ。さらに、違いを排除するのではなく結集させることにより、多様な問題解決策が生まれ、新たな革新に発展させることができるという事例をボランティア活動などから学んだ。それらに加えて、教育実践体験や俳句を中心とする英語による日本文化紹介、宇和島屋での愛媛産品の紹介と販売支援の活動により、多文化共生社会に求められる知識、姿勢、コミュニケーション能力の資質とスキルを向上させることができた。

これらの実践の成果と反省を踏まえ、プログラム内容の相互関連をさらに高め、外部との連携と協働を図り、参加学生がダイバーシティへの理解を深め、より平和な社会を創造する担い手になるためのスキルが身に付くよう、プログラムの内容の開発を継続していきたい。

※本研修は、JASSO 及び愛媛大学学生海外派遣（短期）プログラムの支援を受け実施されている。

参考文献

- 日本国際理解教育学会（編著）（2010）『グローバル時代の国際理解教育』明石書店
- 日本政府観光局（2018）「2017年 訪日外客数（総数）」
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/since2003_tourists.pdf
 （2018年10月1日閲覧）
- はたちさこ・藤井ひろみ・桂木祥子（編著）（2016）『LGBT サポートブックー学校・病院で必ず役立つ』保育社
- 法務省（2018）「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html
 （2018年10月1日閲覧）
- ホーン川島瑤子（2018）『アメリカの社会変革ー人種・移民・ジェンダー・LGBT』筑摩書房